

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	脳神経科学領域 麻酔疼痛制御医学教育研究分野 氏名 竹川 大貴
指導教授氏名	廣田 和美
論文審査担当者	主 査 中村 和彦 副 査 上野 伸哉 副 査 村上 学
<p>(論文題目) Higher plasma leptin and lower C-peptide levels are associated with depression: A cross-sectional study (高い血漿レプチン濃度と低いC-ペプチド濃度はうつ状態と関連している：横断研究)</p>	
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>背景： うつ病は世界中で高い罹患率を示しており、うつ病自体が糖尿病や心血管疾患、癌による死亡率を上昇させるという報告もあり、早期の発見及び治療が必要とされる。近年、うつ病の病態に脳内炎症や代謝障害が関与している可能性が高いが未だ明らかとなっていない。</p> <p>方法： 対象は 2014 年の岩木健康増進プロジェクトデータ本プロジェクトに参加した 1167 人で、その内欠損値のあった 27 人は除外した。うつ病の評価は CES-D を用いて行い、16 点以上をうつ群(D 群)、15 点以下を非うつ群(ND 群)とした。使用した血液検査の項目はインターロイキン(IL)-1β、IL-6、IL-10、腫瘍壊死因子-α、インターフェロン-γ、レプチン(LPT)、副腎皮質刺激ホルモン、コルチゾール、トリグリセリド、空腹時血糖、ヘモグロビン(Hb)A1c、C ペプチドで(C-P)ある。既往歴や内服薬、血圧、体重、身長、腹囲等のデータも使用した。解析方法は、D 群と ND 群に分け、上記項目について連続変数に関しては 2 群間の差異を統計学的に検討した。さらにロジスティック回帰分析を行った。</p> <p>結果： 対象者は 1140 人、D 群 279 人、ND 群 861 人であった。単変量解析 (D 群 vs ND 群)では、性差、年齢、血圧、IL-6、コルチゾール、空腹時血糖、HbA1c で有意差を認めた。多変量解析では、年齢、LPT、C-P のみがうつ病との関連を認めた。</p> <p>考察： 本研究では、単変量解析で IL-6 が有意な相関を示したものの、多変量解析では炎症マーカーとうつ病の関連は認めなかった。本研究では D 群の CES-D 中央値が 19 と軽度うつ患者が多く、これは軽～中等度うつ状態で LPT 濃度は上昇するとしたメタ解析の報告に合致する。C-P はインスリン分泌能の指標となるが、本研究では低血漿 C-P 濃度がうつ病に関連することを多変量解析で示した。</p> <p>結語： 患者特性などの交絡因子で補正した多変量解析の結果、若年、高 LPT 濃度及び低 C-P 濃度がうつ病に関連していることを明らかにした研究で、学位授与に値する。</p>	
公表雑誌等名	J Affect Disord. 2019 Jan 15;243:70-74.